

中世紀行文芸と歌枕*

一字津の山を中心に

李 英 敬**

(e-mail : waiwai@hywoman.ac.kr)

目 次

- 一、はじめに
 - 二、『伊勢物語』における字津の山の表現
 - 三、歌枕としての字津の山
 - 四、中世紀行文芸と歌枕
 - (一)『海道記』の字津の山の表現
 - (二)『東関紀行』の字津の山の表現
 - (三)『十六夜日記』の字津の山の表現
 - 五、字津の山表現史と中世紀行文芸
-

一、はじめに

字津の山は、古くから交通の要衝として平安時代から鎌倉を過ぎ、室町時代にいたるまで七百年間、都と東国を往来する旅人が利用した山である。この山は現在で言うと静岡市宇津谷と岡部町との境界に位置する。今日、宇津ノ谷峠は、平安時代の歌人在原業平が歩いたと言われる蔦の細道（古代の東海道）と、天正一八（一五九〇）年豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻める際に開いたとされる旧東海道（近世の東海道）と、二つに分けられている。

文芸上での字津の山は、始めて『伊勢物語』の「東下り」に取り上げられている。それ以来『伊勢物語』の表現やイメージを原型としながら『新古今』時代になってから歌枕

* 本研究は、2009年度2学期、漢陽女子大学校内研究費によって研究されたものである。

** 漢陽女子大学日語通訳科 教授 日本古典文学

として定着し名所となる。そして、宇津の山は、東海道の旅立ちであるならば、必ずといっていいほど辿る名所になるが、作品によってその歌枕の表現世界とは異なるところに注目した。

本論文では、宇津の山がどのように歌枕として認識されるようになったのかを考察するとともに、それが紀行文の『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』にどのように受容されたかを辿ってみたい。これは、単に三つの紀行文の表現の特色を明らかにすることだけではなく、宇津の山についての表現史を考察することにもなると思われる。

二、『伊勢物語』における宇津の山の表現

『伊勢物語』の「東下り」の叙述については、様々な視点より造型されている。その根幹になるのは、何より旅の性格つまり、何故業平が「東下り」をしたのか、ということが出発点になるだろう。それは、二条の後との忍び恋が発露したため、傷心に発する漂白または貴種流離譚として理解するのが一般的である。それに対して中世近世の古注新注の大部分は勅勘・左遷・流罪説を取っている¹⁾。また、つい最近まで王族だった在原氏の、藤原氏に対するレジスタンスとその果ての弾圧と見る方²⁾もある。一方、都を絶対化する観念性に目指していた旅は、制度的な旅であるとし、主人公昔男は反制度的な逸脱として東下りが『伊勢物語』に造型されている³⁾、とする。

このように、旅の動機から想像される「東下り」の叙述ではなく、表現の面から探って行くと、三河の国、駿河の国、武蔵の国と下つ総の国、の四つの地名が取り上げられていることと、それぞれの地で歌を詠じていることが分かる。そして、三河の国では八橋が、駿河の国では宇津の山と富士山が、武蔵の国と下つ総の国ではその間のすみだ河が取り上げられている。また、それぞれ「かきつばた」「つたかえで」「雪」「都鳥」の風物が挙げられている。次は、その中、本論文の対象である宇津の山の叙述である。

行き行きて、駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、つたかえでは茂り、物心ぼそく、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かゝる道はいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。

駿河なる宇津の山へのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり⁴⁾

1) 日向一雅、「伊勢物語「東下り」をめぐって」、「日本文学」、巻四十巻一号、1991、p. 84

2) 長谷章介『古典文学の風土』諸国編、学灯社、昭38、2、P. 218、

3) 今関敏子「造型される“旅”— 東下りと勅撰集」、川村学院女子大学研究紀要、巻十三巻第二号、2002年、p. 196

『伊勢物語』の東下りは、その地名によって各々多様なモチーフがあるが、宇津の山においては、「いと暗う細き」道、「つたかえで」、「修行者」、「うつつ・夢」の歌が取り上げられている。そして、これらは宇津の山の表現史にかかわっていくのである。

平安時代に旅が可能だった人は、官職の持つ者と僧侶に限ってのことであるから、遠い駿河の宇津の山を歩く貴族たちは少なかっただろう。その貴族の目には、京とは異なる「いと暗う細き」道があるだけであったのである。また、その「いと暗う細き」道には「つたかえで」が茂っている。通常、「つたかえで」は、紅葉すると楓に似ているので「蔦楓」とも呼ばれる。蔦は早くも『万葉集』の柿本人麻呂の長歌にも見られるように、古代から歌に詠み込まれた歌材の一つであった。

135 つのさはふ 石見の海の 言さへく 辛の崎なる いくりにそ 深海松生ふる 荒磯
にそ 玉藻は生ふる 玉藻なす なびき寝し児を 深海松の 深めて思へど さ寝し夜
は いくだもあらず、延ふつたの、別れし来れば 肝向かふ 心を痛み 思ひつつ か
へり見すれど 大舟の 渡の山の もみち葉の 散りまがひに5) (後略)

この『万葉集』の歌の「延ふつたの」の表現からも分かるように、古来の蔦は蔓性の植物の特性を取り上げて詠まれている6)。「つた」が絡まる特性を持つ蔓性の植物で、這っていることは平安時代の人々も認識していたと思われる。

ただ、『伊勢物語』において、「茂り」とあるのは、「つた」が這うだけでなく、木にからまり茂っている様子を強調していると考えられる。また、そのような暗くて心細い道に、「すずろなるめを見ることと思ふに」という心情がプラスされる。「すずろなるめ」というのは、夢にも思ったことのない、とんでもないところであると思う心である。そして、「かゝる道」においても京とは異なる山道が強調される。つまり、「いと暗う細きに」「つたかえでは茂り」「すずろなる」「かゝる道」のように宇津の山道を強調し、心細さを表そうとしている。その心底には、都との対比の中、「望郷」への思いが込められていると思われる。このような、「望郷」の念は、すでに「東下り」の冒頭の三河の国の八橋でも、都にいる愛する女への気持が軸となり、「かきつばた」の歌においても、「乾飯」のことからでも語られていることがわかる。その八橋の叙述と同様に、この宇津の山においても、京の世界とはまったく異なるところの山道を前にして、「望郷」に思いを馳せるのである。

そんなところで知り合いの修行者に出遭うが、その修行者にやはり「かゝる道はいかにかいます」と聞かれる。都から遠く離れたこのような道で何をしているのか、という驚きがまず読み取れる記述である。同時に、あなたのような身分には似合わないところである、という意

4) 日本古典文学大系『竹取物語 伊勢物語 大和物語』岩波書店、p p、116-7

5) 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『万葉集』訳文編、塙書房刊、平成16、p、28-9

6) 『日本うたことば表現辞典』、遊子館、p、392

味も含まれていると思われる。いずれも京との比べによる、または京というところを念頭に入れた上での表現である。そして、その修行者に都へ「文」を頼む。修行者は、都へ手紙を伝える役割として登場する。

「うつつ・夢」歌も望郷への思いが込められた歌である。こんなに遠いところまで来ているとは、本人も偶然出会った修行者も、夢にも現にも思ったことがないことを表している。つまり、歌は前述の地の文を受け入れ、まとめた形で、山名の宇津の山と、その音を掛けた「うつつ（現）」と、それに対立する「夢」との組み合わせである。この歌は、通常相手が思うと夢にその人を見るという意味で、夢であなたに逢わぬのは、私を思ってくれぬからだ⁷⁾、という意を込めた歌として捉える。また、どうも夢にも現にもあなたに逢えないくらい遠い駿河という、とんでもない所まで来てしまっているよ、という解釈も可能である。何れも遠いところからの都への思いを寄せる表現である。

以上、述べたように『伊勢物語』の宇津の山は、実情としての「望郷」の思いの表出が、「いと暗う細き」道、「つたかえで」、「修行者」というモチーフにより記述され、文末の「うつつ・夢」の歌に集約されていると思われる。これが『伊勢物語』の宇津の山の記述の特質であり、後世の宇津の山の表現の原型となる。

三、歌枕としての宇津の山の表現

前述には、『伊勢物語』の宇津の山の叙述の特質について探ってみた。その結果、都への「望郷」の思いが、「いと暗う細き」道、「つたかえで」、「修行者」というモチーフによって叙述されていることが分かった。このような記述は、宇津の山の原型となり、『伊勢物語』以来和歌に詠み込まれるようになる。ここでは、宇津の山の表現が、どのように歌枕として認識されるようになったのかを辿り、宇津の山の表現史を考えて見たい。

まず、初めて宇津の山が詠み込まれた歌集としては、確実な成立年度は未詳であるが、平安前期の歌人で、三十六歌仙の一人である任生忠岑の歌集の『忠岑集』と『古今和歌六帖』に見られる。

するがなるうつ山のべのうつつにもゆめにもひとをみでややみなん⁸⁾（忠岑集）

するがなるうつのを山のうつつにも夢にもみぬに人のこひしき（古今六）

7) 『竹取物語 伊勢物語 大和物語』日本古典文学全集、小学館、p. 121

8) 『新編国歌大観』、角川書店、1993。以下、別の表記がない限り、歌の引用は『新編国歌大観』による。

この歌は、ほぼ『伊勢物語』の歌と同様であり、下の句は変っていて、『伊勢物語』のように望郷の思いが込められ、「夢にもあの人を見ないでおわるのだろうか」⁹⁾という意になる。『古今和歌六帖』の歌も同様であると考えられる。

『伊勢物語』とはほぼ同時代の『忠岑集』の歌から二百年という長い埋もれ期間を持ち、『右大臣家歌合』（一一七九年）に一首が見られる。

宮古へはいまことつけやるべきにうつる山べに逢ふ事そなき（源三位）

この歌は、『忠岑集』と『古今和歌六帖』の歌とは異なり、特に「うつつ・ゆめ」という組み合わせが排除され、「みやこ」「ことつけ」のように『伊勢物語』地の文の表現を取り入れ、観念的で抽象的に詠み込まれている。勿論、典拠となる『伊勢物語』を念頭に入れた歌として考えられ、都へは今も言付けを頼むべきですが、昔の人が都への言付けを頼んだ宇津の山辺にも会えずにいて、それがかなわないのです、という歌であると思われる。この『右大臣家歌合』以後、俊成の歌集である『俊成五社百首』（一一九〇年）に一首が見られる。

旅 恋

夢路にはなれし宿みる現にて宇津の山べのつたふけるいほ（伊勢大神百首和歌）

まず、歌に「旅恋」とあることから、旅の途中での恋の思いを詠んだ歌であると解すべきであろう。そして、「なれし宿」であるが、『伊勢物語』の宇津の山の一つ前の八橋で「かきつばた」の五文字で詠まれた「唐衣きつゝなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」の歌の中に見られる「きつつなれにし」の句に基づいていると思われる。そうすると、夢の中の道では、都で慣れ親しんだ人と共に過ごした宿（家）にいることを見ていますが、現実の道では、宇津の山に多くあるその蔦で屋根を葺いたような庵に過ごしています、というような意味を持つ歌であると考えられる。

この歌を『伊勢物語』の記述から見ると、「夢・うつつ」の歌の表現と、地の文の「つた」の表現とが取り上げられている。そして、そこで出遭った修行者の地の文の叙述の連想により、「いほ」（庵）の表現も取り入れる。つまり、『伊勢物語』の「宇津の山べ」と「つた」という素材とともに、強い恋情を含んだ切実な望郷の念のモチーフを生かし、そうした趣向の上に、「夢路」（昔）と「うつつ」（今）とを対置し、「うつつ」の旅の宿を、修行者とのイメージの連関をもとに閑静な庵に設定している歌であると思われる。それは、『伊勢物語』の宇津の山のイメージをもとに、蔦という風物に「庵」のモチーフ

9) 和歌文学大系『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』、明治書院、1997、12。

が新たに加わったことが特色であると思われる。

『伊勢物語』の「つたかえで」は、「いと暗う細き」道として、繁る蔦が記述され「望郷」への思いが読み取れるが、この歌では、修行者の住む庵の上にある蔦である。また、修行者の場合も、『伊勢物語』は、都に文を頼む役割として登場し、やはり「望郷」への思いが込められているが、この歌では庵に住む閑静な修行者のイメージが浮かび上がる。つまり、宇津の山を真正面から歌う対象にした、宇津の山の表現史上画期的な歌であると思われる。このように『伊勢物語』のイメージをもとにし、「蔦」「庵」のイメージが新たに加わったことは、以後『六百番歌合』においてもっと確実になってゆく。この『六百番歌合』に宇津の山の関連する歌が二首詠み込まれていることによって、宇津の山が歌に多く詠み込まれる契機になる。

蔦

- | | |
|-----|--------------------------|
| 左勝 | 女房 |
| 431 | 宇津の山越えし昔の跡古りて蔦の枯れ葉に秋風ぞ吹く |
| 右 | 寂蓮 |
| 432 | 浅茅たつ庭の色だにある物を軒端の蔦はうち時雨つゝ |

同前

判云、左右共に姿詞は宜見え侍を、右は、「浅茅立つ」といへるも、やふやふしく、下ノ句の「蔦」の「うち時雨」らんも、いかゞと覺侍上に、左、「宇津の山」の「昔の跡」を思出でて、「蔦の枯れ葉に秋風ぞ吹く」といへる心、殊に艶に侍べし。仍、左、尤勝とすべし。¹⁰⁾

この「蔦」の題の歌は、「判云」の前に「同前」と記されている。これは、この前の結番（429と430）の難陳で、「左右共、無指難之由、申之」とあったのと同様であることを意味する。すなわち、431、432の両歌について、左方からも右方からも、特に非難のないことを示している。

女房¹¹⁾、即ち藤原良経の歌は、秋の「蔦」という題で、歌を詠むに当たって、宇津の山というモチーフを取り入れる。このモチーフの取り込みは、『伊勢物語』の世界を典拠として取り入れたことを意味する。「蔦」という題は、『永久百首』（1117）から登場する。そして、この『六百番歌合』で、その歌題を良経が継承しつつ、「蔦」との縁で「宇津の山」を詠んでいると思われる。判者俊成は、『伊勢物語』の世界を踏まえ、秋という季節感を前面に押し出して、冷たい秋風が蔦の枯れ葉をさびしげにざわめかせるという趣向の右の歌に「殊に艶に侍るべし」とする。また、「昔の跡」ということも挙げ、「殊に

¹⁰⁾ 新日本古典文学大系『六百番歌合』岩波書店。p p、160-1

¹¹⁾ 歌合などで身分の高い人が判者が気がねなく判することができるように、本名でなく女房の作とする。

艶に侍るべし」とする。俊成は「蔦」は、宇津の山と結びつくものと考えられ、宇津の山は『伊勢物語』の記述の面影を意識すべきであると強調していると考えられる。

つまり、「昔の跡」「蔦」の表現があるように、『伊勢物語』の宇津の山の叙述の世界を典拠とし、想起させている。しかし、『伊勢物語』においての実情としての「望郷」への思いの表出は見られない。その代わり、「蔦の枯れ葉」「秋風」のような季節感を吹き込んでいることが特徴であろう。そして、判者の俊成も、良経の歌自体が「昔の跡」を想起するものであり、「蔦の枯れ葉に秋風ぞ吹く」のように季節感が見られることから「殊に艶に侍るべし」とする。すでに俊成は、『俊成五社百首』で、「宇津の山への蔦」を詠んだ。そして、『六百番歌合』においては、「蔦」の題で宇津の山が詠み込まれる。即ち、『六百番歌合』の良経の歌は、『五社百首』の俊成の歌を発展させたものとも考えられる。『六百番歌合』のもう一つの歌は、冬の「霰」の題で詠まれた顕昭の一首である。

霰

左持

顕昭

527 宇津の山夕越え来れば霰降り袖はしかねつ哀れこの旅

右

経家卿

528 今日も又交野の御野に霰してかはく間もなされ衣かな

右申云、左歌、無指難。左申云、右歌、古めかし。

判云、左、「袖はしかねつ哀れこの旅」などいへる、寂びては聞え侍を、「宇津の山」こそ、拠り所なくや侍らん。伊勢物語などに、「宇津の山辺のうつゝにも」などいへる所にも、霰降りとも見えず。その故なきならば、霰降りぬべからん山も、「哀れこの旅」といはん所も多く侍らんかし。「宇津の山」、故無くては、さまで拠り所なくや侍らん。右は、「交野の御野」も、かの「濡れぬ宿賃す人しなれば」といへる歌も霰にて、はた鷹狩も今少しおかしく聞ゆ。左右共に、「宇津の山」「交野の御野」も、いつくにてもありぬべく聞ゆ。同程のことと申べし。12)

判詞を、宇津の山に限ってみると、「袖はしかねつ哀れこの旅」の句を、「寂びては聞え侍を」とする。つまり、ものさびてしみじみとした風情が感じられるものの、という意味であるが、宇津の山には拠り所がないとする。また、「霰降り」ということも典拠となる『伊勢物語』に見られない言葉であるとし、霰降る山も、「哀れこの旅」も、特に宇津の山ではなくても、どこにも多くある事柄であるとする。

つまり、判詞は、「霰」が『伊勢物語』の宇津の山の叙述に取り上げられなかったことを指摘し、疑問をもちながら「持」とする。ここで、顕昭には顕昭独自の考えがあったよう

12) 注10) と同じ。p, 195

で、宇津の山がまだ歌枕として定着していない以上は、「雲」を詠んでもかまわないと思ったのではなかろうか。それに対して俊成は、『伊勢物語』の記述を楯にして、宇津の山が、蔦楓の名所（歌枕）であり、秋が似つかわしい場所であることを主張しているのではないかと考えられる。ここで、御子左家と六条家の対立も窺われる。

このように「蔦」は『六百番歌合』で俊成に認められた以来、『御宝五十首』と『水無瀬恋十五首歌合』に一首ずつしか見られないが、再び『新古今』の定家の歌に「蔦の下道」が取り上げることより、同時代に多く詠み込まれるようになった。つまり、宇津の山は、『伊勢物語』の叙述以来二百年という埋もれ期間を過ぎ、俊成の歌や、良経の歌が現れ、認められ、受容されることによって、はじめて「歌枕」として定着していたと考えられる。そして『新古今和歌集』の「キ旅」の歌に四首も入集されるようになり歌枕として定着する。

- 904 駿河なる宇津の山辺のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり（業平）
 981 旅寝する夢路はゆるせ宇津の山関とはきかず守る人もなし（家隆）
 982 都にもいまや衣をうつゝの山夕霜はらふつたのした道（定家）
 983 袖にしも月かゝれどは契をかず涙はしるや宇津の山ごえ（鴨長明）¹³⁾

業平の歌以外の三首は、『伊勢物語』の世界を踏まえながら、それぞれの工夫をこらし詠まれている。まず、家隆の歌であるが、旅寝の侘しさから、業平の歌のように夢路に都の人への思いが込められた歌である。実際、宇津の山には関所はないが、「関」「守人」のような具体的な素材を取り入れることによって、内面の強烈な欲望を投影している。

宇津の山と「衣をうつ」とを掛けて詠み込んだ定家の歌は、衣を打ってくれる都の女を偲ぶ旅先での歌である。漢詩では「柗衣」（とうい）と言う。衣打つということは、衣とか衣服を柔らかくするため、またはつやを出すために、砧で打つことである。都では女が衣を打ち、宇津の山では私が夕霜を手で打ちながら行く。いまこの旅先で着ている衣もきっとあの女が砧を打った衣であろう。遠くにいる女と、京から遠く離れた宇津の山いる男との一体化により、よりなまめかしい表現となる。この歌では、砧を打つことから、聴覚的なイメージも表に顕われている。

長明の歌も、前の定家の歌のように、衣の中の「袖」が取り上げられている。「月」が「袖」に宿ることを、月に約束していないことを、涙は知っているのか、というように、擬人化して、山越えの辛さを訴えている。月が袖に宿るというのは、月の属性である光の存在から発想された視覚的で感覚的な表現である。『新古今和歌集』には、『元久詩歌合』から八首が入集されるが、「山路秋行」の題の中、この家隆の歌と長明の歌の二首が

¹³⁾ 新日本古典文学大系 『新古今和歌集』 岩波書店

取り上げられている。それは当時の人々の歌枕宇津の山への関心を読み取れるところである。これに関して、田尻喜信によれば、名所の「宇津の山」は、新古今の発掘と創始にかゝわるものである¹⁴⁾、と捉えている。

このように、『新古今和歌集』の宇津の山の歌は、『伊勢物語』の世界を踏まえながら、多様な技巧とを取り入れ、より強烈な願望を訴えている。そして豊かなイメージを積み重ねてゆく。

宇津の山月たにもあらぬ蔦のいほにゆめちたえたる風のごえかな（家隆、御宝五十首）
 あらし吹くたかねの雲をかたしきて夢路もとほし宇津の山ごえ（忠良、正治初度百首）
 古里のたよりとならばことづてん袂にむかふうつの山風（雅経、正治後度百首）
 あらしふくたかねのくもをかたしきて夢路もとほしうつのやまこえ（既出、三百六十番歌合）
 おひ風にならのはしはをかさしてもふぶきにたへぬうつの山ごえ（建仁元年十首和歌）
 あづまぢや春のゆくへをこよひより夢にも告ようつのやまふみ（寂蓮、千五百番歌合）
 みやこおもふそなたの風を身にしめて月にともなふうつの山ごえ（保季、千五百番歌合）

引用の『新古今和歌集』以後の宇津の山の歌を見ると、『六百番歌合』の良経の宇津の山と「秋風」の結びつき以来、典拠の『伊勢物語』を基盤にし、「蔦」以外に「風の音」「嵐」「山風」「雲」「追風」「春」「月」のような自然風物が加えられる趣向が見られる。以後、紙幅上引用は挙げられないが、『元久詩歌合』『最勝四天王院和歌』などにおいても同様である。「蔦のいろ」「つゆふき」「秋もふけゆく」「移るばかりにみねの色」「思ひそめけむ」「うつろふ蔦」「もみち」のように、特に「蔦」が固定化され、そこに自然風物が加えられる。そして、宇津の山は、モチーフの広がり、歌枕としての豊かなイメージを備えてゆくのである。

四、 中世紀行文芸と歌枕

（一）『海道記』の宇津の山の表現

宇津の山が、『伊勢物語』に叙述された以来、歌枕としての定着とその後の展開について探ってみた。ここからはそうした表現史と中世紀行文の表現とがどのようにかわるか、ということを探ってゆきたい。まず、『海道記』の叙述であるが、宇津の山の叙述は、序の旅の概略部分と道の記と称されるところの、二箇所により取り上げられている。序においての宇津の山は、「宇津ノ山路ニツタヲ尋ヌレバ、昔ノ跡夢ニシテ風ノ音オドロカス」の

14) 田尻喜信「名所歌「宇津の山」考」、跡見学園国語科紀要19, p. 1270

ように簡略に記述されているが、道の記においての宇津の山は長く語られる。

丘部ノ里邑ヲ過テ遙ニ行バ、宇津の山ニカゝル。此山ハ山中ニ山ヲ愛スル巧ノ削成セル山也。碧岸ノ下ニ砂長シテ巖ヲタテ、翠嶺ノ上ニハ葉落テ壤ヲツク。肢ヲ背ニ負ヒ、面ヲ胸ニイダキテ、漸ニノボレバ、汗肩袒ノ膚ニ流テ、単衣ヲモシトイヘドモ、懷中ノ扇ヲ手ニ動シテ、微風扶持可ナリ。カクテ森々タル林ヲ分テ、峨々タル峰ヲ越レバ、貴名ノ譽ハ此山ニ高シ。大方遠近ノ木立ニ心モワケラレテ、一方ナラヌ願望ニ思ミダレテ過レバ、朝雲峰クラシ、虎李將軍ガ棲ヲ去リ、暮風谷寒シ、鶴鄭太尉ガ跡ニ住ム。既ニシテ亦赤羽西ニ飛ブ。眼ニ遮ル者ハ、桧原槲葉、老ノカコヽニ疲タリ。足ニ任スル者ハ苔ノ岩根ツタノ下道、嶮難ニタヘズ。暫クウチ休メバ、修行者一両客、繩床ソバナタテ又休ス。

立帰ル宇津ノ山伏コトツテン都恋ツ、独越キト¹⁵⁾

この道の記においての宇津の山の叙述は、和歌的伝統を踏まえている序の文とは異なり、宇津の山が難所であることが、独自の語られている。それは、山の模様と、その山を越える人の姿によって記述されていることが分かる。

まず、山の表現であるが、削り立てたような山、「碧岸」の下の方、「翠嶺」の上の葉と土などの表現は、まるで絵に描いているようである。また、「巧ノ削成セル」「碧岸」「巖」「岩根」の表現から、険しい岩の山であることが強調される。まさに「険難」な山の外観である。そのほか、険しい山を越える本人の姿から宇津の山が難所であることが語られる。その際、「肢」「背中」「面」「胸」「汗」「肩袒」「膚」「懷中」のように、身体と、身体を被う衣の表現が多く見られる。このような身体的な表現は、文末の「眼」「足」にも続く。また、「肩袒」は、肩、つまり上半身を肌脱ぎにした様子である。和歌の世界が、貴族宮中の晴れの世界であるならば、身体とか日常的な生々しい表現などは、庶民的な憂の世界に属する。晴れの世界と憂の世界との境界のない、あるいは境界を崩しているところに『海道記』の特色があると思われる。このような記述は、対句、縁語擬人法、反復という表現によって成り立っていることは言うまでもない。

以上のように『海道記』は、難所として宇津の山を表現した初めての作品であり、その難所というモチーフと表現などは、歌枕の伝統の上にあるのではなく、それとは異なるところにある、ということがこの作品の特色であると思われる。

(二) 『東関紀行』の宇津の山の表現

『東関紀行』の駿河の旅の中、宇津の山の叙述が一番長く語られている。その内容

15) 新日本古典文学大系『中世日記紀行集』岩波書店、1990年、p.94。以下、「海道記」「東関紀行」「十六夜日記」のテキストの引用は、同書によるもので、作品名とそのページだけを明記する。

も、僧との話、卒塔婆の話、宇津の山の木陰の墓の前での梶原景時・西行を偲ぶ話、と多様である。次は、その叙述の冒頭である。

宇津の山を越ゆれば、蔦かづらはしげりて、昔の跡たえず。業平修行者にことづてしけん程、いづくなるらむとく程に、道のほとりに札をたて立てたるを見れば、無縁の世人あるよしを書けり。道より近きあたりなれば、少たち入て見るに、わづかなる草の庵のうちに独の僧有。（p 143）

『東関紀行』は、「蔦かづらはしげりて」「昔の跡」「業平」「修行者」のように『伊勢物語』への面影が濃い。「いづく」の表現からも分かるように、「昔の跡」を探しつづけている。その反面、「草の庵」のように、宇津の山に庵があるというのは、俊成の歌の趣向と重なるところがあると考えられる。そして、「僧」との話し合いの叙述あと、卒塔婆のある墓の前に立つ。

この庵のあたり幾程遠からず、峠といふ所に至りて、大なる卒塔婆の年経にけると見ゆるに、歌どもあまた書付たる中に、「東路はこゝをせにせん宇津の山哀もふかし蔦の細道」とよめる、心とまりておぼゆれば、其かたはらに書付く。

われは又これをせにせん宇津の山わきて色有つたのした露（p、144）

卒塔婆は、梵語であり、死者の供養のためや霊域を示すために立てた細長い板である。その卒塔婆には、蔦があるからこそ宇津山が東海道の一番すばらしい所である、と書き付けてある。そして、その歌に対し、「われはまた」と同感し、その感懷を一首の歌にして書き付ける。『東関紀行』の叙述は、ここで終わらず、宇津の山を過ぎて行く中、「塚」に目を向いたり、「舵原が墓」のように墓にも関心を寄せる。その「舵原が墓」の前で、舵原の生きた痕跡や、彼の殺された跡が何処であるかを見回し、崇徳院の御陵の前の西行を思い出したり、まさに連想の続きに思いを馳せる。

以上のように、『東関紀行』において、歌枕宇津の山は、物語の世界である『伊勢物語』の面影を強く意識していることが分かる。また、宇津の山の叙述に、「草の庵」の表現が見られるのは、俊成の歌の趣向と重なるところがあり、「蔦の細道」「つたのした露」という表現からも、和歌的表現の世界が垣間見られる。

一方、「卒塔婆」「塚」「墓」、のように過去の人の跡に注目し、その人と関わりのある事柄を述べてゆく。その際、旅先でしか接し得ない、逸話、いわゆるエピソードも綴るが、主に過去の痕跡に中点が置かれている。つまり、『伊勢物語』以来の和歌的表現世界を確認したうえで、「卒塔婆」「塚」「墓」などの新しい「跡」に注目し、いわゆる伝統と今の現実とを重ねて語ってゆくのである。

(三) 『十六夜日記』の宇津の山の表現

『十六夜日記』の叙述は、全体的に簡潔で、宇津の山の叙述も比較的簡潔である。そしてその表現は、一つ一つ『伊勢物語』の面影で彩られていると思われる。

宇津の山越ゆる程にしも、阿闍梨の見知りたる山伏行あひたり。「夢にも人を」など、昔をわざとまねびたらん心地して、いと珍かに、おかしくも哀にもやさしくも覚ゆ。急ぐ道なりと言へば、文もあまちはえ書かず。たゞやむごとなき所一つにぞ、音信れ聞ゆる。

我心うつゝ共なしの宇津の山夢にも遠き都ふとて

蔦楓時雨れぬ隙も宇津の山に袖の色ぞ焦がるゝ (p、192)

まず、「見知りたる」と「山伏行あひたり」の表現は、『伊勢物語』の「見し人なりけり」と「修行者あひたり」の表現をそのまま踏まえている。末尾の「文」などの用語も『伊勢物語』の表現と同様である。そして、「いと珍かに、おかしくも哀にもやさしくも覚ゆ」という表現から、感動の強さ、大きさが感じられる。阿仏尼は、『伊勢物語』の世界と自身の体験とが重なったことに、驚嘆し満足していると考えられる。そういう傾向は、詠まれた歌においても同様である。初めの「我心うつゝ共なしの宇津の山夢にも遠き都恋ふとて」の歌は、『伊勢物語』の世界の枠を出ていない表現である。『伊勢物語』のように、地名の「宇津」の音を掛けた「うつつ」と、これに対立する「夢」とを取り入れて詠んでいる。後の歌も同様であり、「蔦楓」に「時雨」を配したのは、阿仏尼が旅をした時期が十月という季節によるものであると思われる。

このように、『十六夜日記』において、歌枕宇津の山は、『伊勢物語』に詠まれた伝統的なイメージを確認し、その時代に回帰する傾向の作品であると考えられる。

五、宇津の山の表現史と中世紀行文芸

宇津の山は、始めて『伊勢物語』の「東下り」に取り上げられ、歌に多く詠まれるようになった、駿河の歌枕である。『伊勢物語』において宇津の山は、実情としての「望郷」の思いの表出を、「いと暗う細き」道、「つたかえで」、「修行者」というモチーフの連なりによって記述される。そして、そのような思いは、文末の「ゆめ・うつつ」の歌に集約されている。これが、『伊勢物語』の宇津の山の記述の特質であり、後世の宇津の山の表現の原型となると考えられる。

このような、『伊勢物語』のイメージや表現は、『伊勢物語』とほぼ同時代の『忠岑集』に一首が見られる。そして、二百年という長い埋もれ期間を持ち、『右大臣家歌合』に一首が見られるようになる。その後、『俊成五社百首』の俊成の「宇津の山への

「葛」の歌や、『六百番歌合』の「葛」という題で良経の歌が現れ、認められ、受容される。そして『新古今和歌集』に四首も入集されることによって歌枕として定着した。つまり、宇津の山は、「葛」という風物と『伊勢物語』の面影のイメージが固定化される名所となる。そして、そのような固定化されたイメージの基盤の上、「風の音」「嵐」「山風」「追風」「雪」「吹雪」「雲」「月」のような自然風物と結びつき詠み込まれてゆく。また、葛の表現も、「葛のいろ」「葛の色もうつりにけりな」「うつろふ葛」「もみぢ」のように、秋という季節感と色彩感が加えられる。

これが『新古今和歌集』時代以後になると、このように、秋のイメージの強い葛も、「霞をわくる葛の細道」「葛の若葉」「葛の青葉」「霞」「花」のように、春のイメージの表現が見られる。固定化された「葛」のイメージの上に、春という季節感と自然風物とが結び付けられることによって、宇津の山の表現世界やイメージは豊富になって行く。

このような『伊勢物語』の表現と、和歌の世界における宇津の山は、東海道を辿る『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』においても叙述されている。そして、作品ごとにその表現の相違が見られ、その作品が特質が垣間見られる。

『海道記』において宇津の山は、和歌的伝統を踏まえている序の文と、難所としての宇津の山の独自の表現とが記述されている。「宇津ノ山路二ツタヲ尋ヌレバ、昔ノ跡夢ニシテ風ノ音オドロカス」の序の文は、強く歌枕の地を意識し、尊重していることの証拠であると思われる。反面、山の外観、山越えするときの本人の生々しい身体的な事柄、山越えの楽しみなどの、難所である宇津の山が、対句、縁語、擬人法、反復などの表現によって記述されている。『海道記』の宇津の山は、『伊勢物語』以来の和歌的伝統を踏まえながらも、その延長上にあるのではなく、それとは異なるところにあると考えられる。

『海道記』から二十年後の『東関紀行』の宇津の山は、『伊勢物語』と和歌の世界の跡を確認することから出発している。そして「卒塔婆」「塚」「墓」などのモチーフから、過去の人への跡に注目し、墓の前での梶原景時と西行を偲ぶように、その人と関わりのある事柄の逸話、いわゆるエピソードで綴ることが多い。『東関紀行』において歌枕宇津の山は、伝統的な和歌の世界の跡を確認した上で、「卒塔婆」「塚」「墓」などの新しい「跡」に注目し、伝統と今の現実とを重ねて語ってゆくのである。

これに対し、『十六夜日記』は両作品とは随分時間的に離れた作品であるが、『伊勢物語』の表現の面影が濃い。「見知りたる」と「山伏行あひたり」の表現からも『伊勢物語』をそのまま取り入れていることが分かる。また、「いと珍かに、おかしくも哀にもやさしくも覚ゆ」という表現から分かるように阿仏尼は、『伊勢物語』の世界と自身の体験とが重なったことに、驚嘆し満足している。その時、詠まれた二首の歌も、『伊勢物語』の世界の枠の内にある。『十六夜日記』において歌枕は、歌の世界を思い出させるところであり、『伊勢物語』に詠まれている伝統的なイメージを確認し、そこに回帰する傾向の作品であると考えられる。

以上のように、特に『海道記』の宇津の山の表現は、『東関紀行』と『十六夜日記』とは異なり、伝統的な和歌の表現世界とはかけ離れた表現の特質が見られるのである。それは、『海道記』の支えられる社会的・文化的ネットワークや、リテラシー、イデオロギなどが、和歌という伝統とは異なるところにあったのではないかと思われる。これに関しては、今後の課題にしたい。

【参考文献】

- 今関敏子（2002）「造型される“旅”—東下りと勅撰集」、川村学院女子大学研究紀要、
 卷十三卷第二号、
- 佐竹昭広木下正俊小島憲之共著（2004）『万葉集』訳文編、塙書房刊、p、289
- 田尻喜信（1971）「名所歌「宇津の山」考」、跡見学園国語科紀要19、p、1270
- 山本光正（2008）『東海道の創造力』臨川書店、p、24
- 長谷章介（1973）『古典文学の風土』諸国編、学灯社、p、218、
- 西沢正史編（2001）『古典文学の旅の事典』東京堂出版、p、71
- 日向一雅（1991）「伊勢物語「東下り」をめぐって」、「日本文学」巻四巻一号、p、84
- 日本古典文学大系（1986）『竹取物語 伊勢物語 大和物語』、岩波書店、pp、
 116-7
- 日本古典文学全集（1999）『竹取物語 伊勢物語 大和物語』、小学館、p、121
- 和歌文学大系（1998）『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』、明治書院、
- 新日本古典文学大系（1990）『新古今和歌集』岩波書店
- 新日本古典文学大系（1990）『中世日記紀行集』岩波書店、
- 新日本古典文学大系（1990）『六百番歌合』岩波書店
- 『日本うたことば表現辞典』（2003）遊子館、p、392
- 『国史大辞典』（1980）吉川弘文館
- 『新編国歌大観』（1993）角川書店

要 旨

宇津の山は、始めて『伊勢物語』の「東下り」に取り上げられ、実情としての「望郷」の思いの表出が、「いと暗う細き」道、「つたかえで」、「修行者」というモチーフにより記述され、文末の「うつつ・夢」の歌に集約される。これが『伊勢物語』の宇津の山の記述の特質であり、後世の宇津の山の表現の原型となる。

それから二百年後、『俊成五社百首』と『六百番歌合』でそれぞれ「宇津の山への蔦」と「蔦」の題で詠まれた後、『新古今和歌集』に四首も入集されることによって歌枕として定着する。そして、宇津の山は「蔦」という風物と『伊勢物語』の面影のイメージとが固定化されるが、以後、風、秋、春という季節感と自然風物が加えられ、多様なモチーフの工夫により、より情調深いイメージの広がりを持つようになる。

このような『伊勢物語』と和歌の世界の宇津の山の表現は、東海道を辿る中世紀行文においても叙述される。『海道記』において宇津の山は、難所というモチーフを取り入れ、山の外観とその山を越える本人の身体的な事柄を、対句・縁語・反復などの表現方法を通して独自の記述する。『東関紀行』は『伊勢物語』の跡を確認した後、「卒塔婆」「塚」「墓」のように新しい跡にも注目し、伝統と現実とを重ねて語ってゆく。これに対し『十六夜日記』は、『伊勢物語』の世界と自身の体験とが重なったことに驚嘆し、叙述においても和歌の伝統的なイメージや表現世界に回帰する趣向である。

以上のことから、特に『海道記』の宇津の山の表現は、『東関紀行』と『十六夜日記』とは異なり、伝統的な和歌の表現世界とはかけ離れた表現の特質が見られるのである。それは、『海道記』の支えられる社会的・文化的ネットワークや、リテラシー、イデオロギなどが、和歌という伝統とは異なるところにあったのではないかと思われる。これに関しては、今後の課題にしたい。

キーワード：宇津の山、東下り、蔦、歌枕、難所、跡

투 고 : 2010. 5. 31
1차 심사 : 2010. 6. 12
2차 심사 : 2010. 6. 26